

スカリー・スクエア——ボストンの失われたレガシーと表象
Scollay Square: Lost Legacy of Boston and Its Representation

平林 美都子

HIRABAYASHI Mitoko

消えた街並み

アメリカでも最も古い街の一つであるボストン (Boston) は、現在では経済と文化の中心地として多くの観光客をひきつけている。アメリカの最初の大学であるハーバート大学を始め、MIT の略称で有名なマサチューセッツ工科大学 (Massachusetts Institute of Technology)、ボストン美術館 (Museum of Fine Arts, Boston) やイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館 (Isabella Stewart Gardner Museum)、ボストン交響楽団 (the Boston Symphony Orchestra) など、教育や芸術面の施設でも世界に名を馳せている。その一方、アメリカ創立の地であるボストン発展の原点でありながら、現在では地名までも失ったスカリー・スクエア (Scollay Square) について、どのくらいの人々が知っているのであろうか。スカリー・スクエアは半世紀ほど前に一掃され、現在はガヴァメント・センターやシティ・ホールのビルが立ち並ぶ新たな都市景観へと生まれ変わった。スカリー・スクエアの名前はもはや現在のガイドブックにも触れられていない。本稿ではスカリー・スクエアの発展と衰退、そして消滅の歴史を概観し、それが持つ表象の意味・意義について考えたい。

イングランドのボストンとアメリカのボストン

イングランドのボストンはイングランド中東部リンカンシャーの港町である。紀元 654 年、サクソン人の僧セント・ボトルフ (St Botolph) が修道院を建てた場所がボストンであったと言われており、ボストンという地名の由来となった。17 世紀のボストンは、地理的な要因によってヨーロッパ大陸からの宗教改革にいち早く接触した。ピューリタニズムになじみ深い土地柄のため、国教会の強制に抵抗する人々も多く現われていた。

1612 年、ジョン・コットン (John Cotton, 1584-1652) は聖ボトルフ教会の助任司祭として着任した¹。非国教会派寄りの彼の説教は宗教の自由を求める人々に好感を持たれた。しかしピューリタンへの弾圧が厳しくなり、1620 年にはプリマスから 100 人ほどの「ピルグリム・ファーザーズ」がアメリカへ渡り、現在のアメリカのプリマスへ到着した。1630 年にはサウザンプトンからジョン・ウィンスロップ (John Winthrop, 1587-1649) をリーダーとし、さらに多数の団体がアメリカへ渡航し、マサチューセッツ湾植民地を作り上げていった。後者の渡航の折、コットンはサウザンプトンで告別説教を行なった。この頃からコットンに対するロンドン主教の迫害が激しくなってきた。1633 年には国教

会に対する不服従を理由に司祭職を停職となり、コットンもまたアメリカ移住を決意したのである。

アメリカのボストンは地形的特徴から、当初の移住者たちによってトリマウンテン (Trimountain 三つの山) と呼ばれていた²。現在の州議事堂があるビーコン・ヒル(Beacon Hill)、ルイズバーグ・スクエア (Louisburg Square) があるマウント・ヴァーノン (Mount Vernon)、ペンバートン・スクエア (Pemberton Square) があるペンバートン・ヒルの三つである。移民の指導者となる人々がイングランドのボストン出身であったことから、移民後まもない 1630 年 9 月、ボストンと呼ばれることになった。ジョン・コットンの屋敷は現在のペンバートン・スクエアの南に建てられた。この丘は彼の名前に因み、コットン・ヒルと呼ばれた。

18 世紀半ばになると、本国イギリスが植民地に度重なる課税をしたため、ボストンはそれに対して抵抗するようになった。1765 年の印紙税、そして 1773 年には茶への課税が法制化され、イギリスとの緊張関係は高まっていった。その間に、ボストン大虐殺事件 (1770 年)、ボストン茶会事件 (1773 年)、ポール・リヴィアの真夜中の騎行 (1775 年)、ボストン包囲戦というイギリスとの関係を悪化させていく事件が次々と起こり、独立戦争へと突入していったのである。1776 年 7 月 4 日、アメリカはイギリスからの独立を宣言し、7 月 18 日にはボストンの (旧) 州議事堂にて独立宣言が読み上げられた。

スカリー・スクエアの誕生から繁栄まで

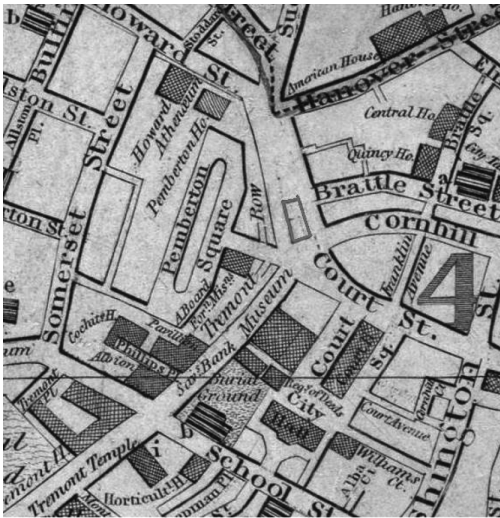
1795 年、不動産業を営むウィリアム・スカリー (William Scollay, 1756-1809) が、ケンブリッジ通りとコート通りの交差点にあった 4 階建ての建物を購入した。ちなみに彼の姉の孫はハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) である³。その交差地域はやがてスカリー・スクエアと呼ばれるようになり、1838 年 6 月から公式名称となった⁴。現在の地下鉄駅ガヴァメント・センター地域である。

スカリー・スクエアにはボストン建設当時から、ジョン・ウインスロップら政治の指導者や知識人らが住んでいた⁵。歴史的に知識人の集う場所として知られたスカリー・スクエアの東の一角、コーンヒル (Cornhill 図 1、図 2)⁶は、1800 年代半ばから 30 軒もの本屋が並び、ハーヴァード大学の学生たちが足しげく通う場所だった。出版社や印刷業者もコーンヒルにオフィスを構えていた。奴隷制に反対するウィリアム・ロイド・ギャリソン (William Lloyd Garrison, 1805-79) もコーンヒルに事務所を開き、ここから『リベレイター』(*The Liberator*, 1831-65)⁷を発行した。彼の事務所はラルフ・エマーソン (Ralph Waldo Emerson 1803-82)、ヘンリー・ソロー (Henry David Thoreau 1817-62)、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne 1804-64) ら、奴隷制廃止論

者たちが集う場となった。南北戦争時には、何百人もの奴隷がギャリソンのオフィスに匿われ、地下鉄道組織によって北部への逃亡を助けられた⁸。さらに、電信や電話の発明家であるサミュエル・モース (Samuel Morse, 1791-1872)、蓄音機や電球など数多くの発明を手掛けたトマス・エディソン (Thomas Edison, 1847-1931)、実用電話を発明したグレアム・ベル (Alexander Graham Bell, 1847-1922) もスカリー・スクエアに仕事場を持っていた⁹。

なかでもハワード劇場 (Howard Athenaeum) はスカリー・スクエアのシンボリックな存在だった。この劇場は元はキリスト再臨派¹⁰の建物だった。しかし、世界終末が予言された 1843 年に終末が到来しなかったため、教徒たちは教団から離れていった。その後、建物は売却され、ハワード劇場としてオープン。元の建物は 1846 年の火事で焼失したが、再建後は軽喜劇やシェイクスピア劇の上演劇場となった。19 世紀末になると、劇場近隣のウェスト・エンドやノース・エンド地域は、新たな移民、とくに労働者階級のアイルランドの移民の居住地となり、スカリー・スクエアは変わっていった (Kruh 57)。20 世紀に入って商業地域としてのスカリー・スクエアの賑わいに翳りが見え始めると、ハワード劇場はオールド・ハワードと称されるようになり、出し物の中心はバーレスクのストリップ・ショーが中心となった。当時、ハーヴァード大学の学生たちもチャールズ川を渡ってショーを楽しんだと言う (Kruh 66)。

1930 年代のオールド・ハワードはショービジネス世界では名前を馳せ続けていた。船員、会社員から学生、さらには当時の市長までもオールド・ハワードのショーを楽しんだ (Kruh 69-71)。しかし、1933 年にはショーの内容に問題があるとされ、劇場は 30 日間の営業停止処分を受けた。多くの劇場ファンが存在する一方で、健全な街づくりを求める声も高まり、結局、1953 年 9 月にオールド・ハワードは営業禁止となった。それから 8 年後の 1961 年 6 月 20 日、劇場で原因不明の出火があり、建物は大きく損壊した。スカリー・スクエア再開の計画がすでに進んでいたときの事である。



(図1) 1851年当時。中央の四角い
枠がスカリー・スクエア
コーンヒルはそこから右に
入っていく街路
("And This Is Good Old Boston")



(図2) Cornhillは現在、City
Hall Plaza となっている。
左は City Hall。
(2013年11月撮影)

都市開発と「スカリー・スクエア」の表象

1949年の住宅法によって、連邦は都市開発の援助金として50億ドル拠出することになった¹¹。それを受けて、1950年、ボストン住宅公社¹²はスラム化していたウェスト・エンド地区を再開発のターゲットにした(図3)。当時41エーカーのウェスト・エンドに1万人の住人がいた(Kruh 127)¹³。1957年、商業・産業開発のための新たな組織であるボストン再開発機構が設立されると、ウェスト・エンド開発プロジェクトはそちらへ移管された。同年、ボストン再開発機構はウェスト・エンドの開発に着手。住人たちは当地に建設予定の高層アパートへ入居ができることを約束されて、古巣を離れる決心をした。ところが新しいアパートは家賃が高すぎて彼らが住める場所ではなかった。結局、ウェスト・エンドの住人たちは、下層階級層が住める地域に離散せざるをえなかったのである。

ウェスト・エンドの取り壊しの手法は、当時多くの物議を醸した¹⁴。しかし、新しいガヴァメント・センターの建設計画もすでに動き出していた。スカリー・スクエアは、二つの鉄道駅の間にあること、六つの地下鉄駅から歩いて行ける距離であること、飛行場から近いことなどから、建設予定のガヴァメント・センターには最適地であった。その上再開発機構にはスカリー・スクエアの開発を進めるべきさらに明白な理由があった。当時のボストンは50万人都市の中で最下位だと評されるほど、課税標準は最低ランクだった¹⁵。とりわけスカリー・スクエアの1957年度の課税標準は、大恐慌の頃の三分の一であり、空き店舗数は27パーセントにもものぼっていた (Kruh 128)。「ボストンのどや街」¹⁶と呼ばれるまでになったスカリー・スクエア一帯の再開発は、市の再生を担う当局にとって最優先事項だったのである。

ジョーン・イラクアは、ボストン再開発機構がスカリー・スクエアの開発に当たり、市民から再び反発を招かないような策を試みたと指摘する¹⁷。それは建物などの外観のみならず、スカリー・スクエア全体の道徳的荒廃ぶりを表象することであった。「再生と犠牲のレトリックで、スカリー・スクエアの取り壊しが必要だと市民に納得させる」ことが必要だったのである (Ilaqua 4)。

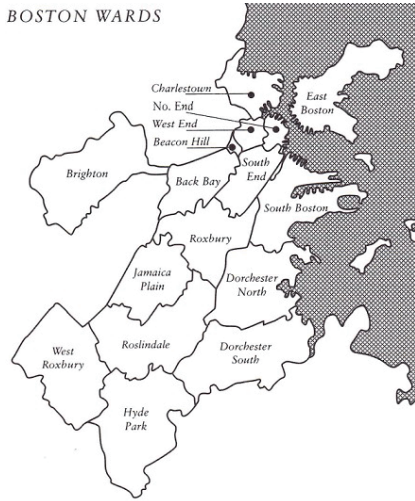
20世紀の半ば、スカリー・スクエアに関しては矛盾した二つの見方が存在した。一つは、歴史的な地域であるから取り壊さずに残すべきだという意見であり、もう一つは、もはや時代遅れでありしかも不道德な場所だから一掃すべきだという意見である。1909年の創業以来、味と価格の点で評判が良かったジョー・アンド・ネモのホットドッグ店¹⁸を始め、近隣の住民が愛着を持つ店がありながら、スクエアの悪評は徐々に濃厚になっていった。ダニエル・ギルバートは「ガイドブックからポピュラーカルチャーまで、スカリー・スクエアは道徳的腐敗と社会的逸脱の場所として特徴づけられている」(Gilbert 103) と言い、1950年前後のガイドブックや小説において、スカリー・スクエアがどのような場所として扱われていたかを分析している¹⁹。A・S・リヨンの『ボストンへの招待』(*Invitation to Boston*, 1947) には、補足的な章の一部としてスカリー・スクエアを取り上げている。リオンはそこを「夜になると活気づく」街だと言い、次のように続ける。

You can negotiate for a remarkable tattoo or explore the dubious delights of a penny arcade. And on a corner near such entertainments you can see at any time of year an indefatigable band and a preacher hopefully trying to convert the derelicts. On Howard Street itself, trod by many who left the Old Howard's stage for prominence elsewhere, there is a sign, Rescue Mission. (A. S. Lyon 220)²⁰

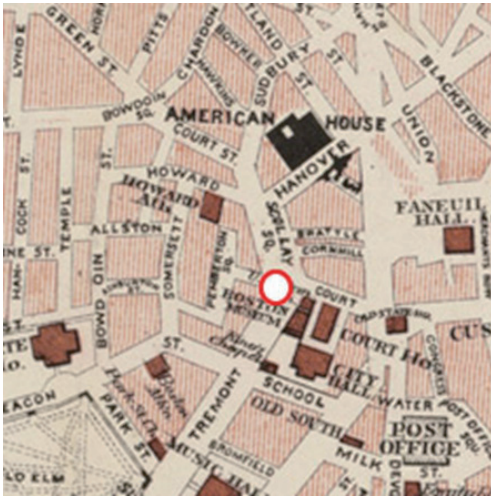
スカリー・スクエアは「見捨てられた人」が集まる「常軌を逸した風景」(Gilbert 130)なのだ。ギルバートが説明するように、「スカリー・スクエアの象徴的意味を推し進め」、「再開発連合体に道徳的な改善と浄化の一つとしてそのプロセスを考案させる」ときに、「スカリー・スクエアのレトリカルな力が利用された」のである (Gilbert 130)。スカリー・スクエアの古びた様子は、「よろめきなから歩き、友もない落ちぶれ果てた老人の疲れた、あきらめきった顔つき」をしている老人さながらの形容で、新聞も同様のレトリックを反復した (*Globe* 1962, Ilaqua4)。オールド・ハワードが1961年に火事によって損壊したことはスクエアの衰退を象徴し、再開発推進派にとっては好機となった。同年、ガヴァメント・センター・プロジェクトとしてスカリー・スクエアの街並みは取り壊され、シティ・ホール、シティ・ホール・プラザが整備され、都市再生が進んでいった (図4、5、6)。

スカリー・スクエア取り壊しには別の問題もあった。ウェスト・エンドの住民が1958年に立ち退きを迫られたとき、スカリー・スクエアは引っ越し先の一つであった。それからわずか数年で、スカリー・スクエアまでも取り壊しの対象となったのだ。このことは、開発当局がスカリー・スクエアを行く先のない人々の住処だと見なしていたという事実を暴露している。ともかくも、ウェスト・エンドの移住者は二度目の立ち退きを迫られることになったのである。「改善と浄化」を徹底させるためには、スカリー・スクエアの過去の評判も一掃する必要があった。物理的な取り壊しに加え、地名の削除によって、歴史の痕跡さえも消したいという当局の意図は徹底されたのである。

再開発後、シティ・ホール・プラザ周辺は官庁やオフィス街のため、夕方5時以降と週末は必然的に人通りが少ない場所となった。都市開発の約20年後の1986年6月20日、ボストン市に本拠を置く全米プロバスケット協会チームであるボストン・セルティックスのリーグ優勝の祝賀セレモニーが、シティ・ホール・プラザで行われた。式典が終わって閑散としたプラザでラジオ中継をしていたジェリー・ウィリアムズ (Jerry Williams, 1924-2003) は、「スカリー・スクエアからの放送です」と言ったところ、その後2時間、かつてのスカリー・スクエアを知るリスナーからの電話が鳴りっぱなしだったと言う。このことがきっかけとなり、ウィリアムズはスカリー・スクエアの名前を復活させるキャンペーンを始め、1987年4月、スカリー・スクエアという歴史上の名前がプラークに復活したのである (Kruh 152)。



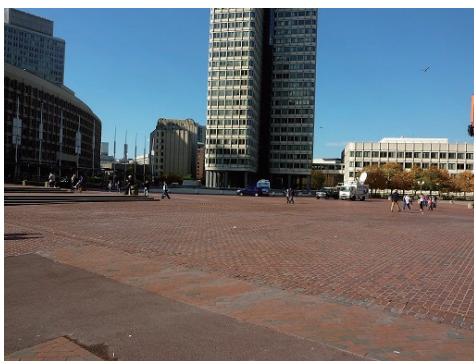
(図 3) ボストン行政区
(Thomas H. O'Connor, 2)



(図 4) 1883年のスカリー・スクエア
(Norman B. Leventhal Map Center)



(図 5) B.R.A. map of the Government Center project area より
(David Kruh3)



(図6) スカリー・スクエアにそびえるガヴァメント・センター
(2013年11月筆者撮影)

「ダンシング・ガールズ」におけるスカリー・スクエアの表象

最後にスカリー・スクエアの表象の例を、カナダの作家マーガレット・アトウッド (Margaret Atwood, 1939-) の「ダンシング・ガールズ」(“Dancing Girls”) において確認しておきたい。アトウッドはトロント大学を卒業後、1961年にアメリカのボストンにあるラドクリフ大学の大学院に進学し、1年で修士号を取得、翌年にハーヴァード大学の博士課程に進んだ。これはスカリー・スクエア取り壊し時期の最中だと思われる。短編集『ダンシング・ガールズ』(*Dancing Girls*) には1971年から77年までに書かれた14の短編が収められている。「スカリー・スクエア」の地名が登場する短編「ダンシング・ガールズ」の時代設定は、その地名が含蓄する評判が残っている年代であり、スカリー・スクエア取り壊し前後あたりだと推定できる²¹。

「ダンシング・ガールズ」の主人公アン (Ann) はエリートコースを歩むことを人生の成功の道と考えて、アメリカの大学院へ留学。非の打ち所のない都市設計士の資格を身に付けたら、故郷のトロントへ帰ろうと考えている。下宿屋のノーラン夫人 (Mrs. Nolan) はアンを同国人 (米国人) のようにみなしているが、アン自身はカナダ人としてのよそ者意識がなくなるわけではなかった。ある日、隣室にアラブ人留学生が越してきた。同じくよそ者であるアラブ人の孤独な様子にアンは同情するものの、無気力になっている彼に関わる気持ちはなかった。人間は成功者と敗残者に分かれていると彼女は理解していたのである。

実は「ダンシング・ガールズ」にボストンという地名は明示されていない。しかし、アンが留学先が都市デザイン分野で最も優れているという評判の大学であること、物語の終わり近くで、アラブ人学生の部屋にやってきた踊り子たちが「スカリー・スクエアの売春婦」(Atwood 211) として描写されていること、さらに「バックミンスター・フラーの講義に出た」(207) ことなど、これ

らの説明や固有名詞からこの地がボストンであり、大学がハーヴァードであることは明白である。建築デザイナーとして世界的に有名なフラウ (Buckminster Fuller, 1895-1983) はハーヴァード大に入学 (中途退学)、1961年から62年には同大学のチャールズ・エリオット・ノートン詩学講座の教授に任命された²²。これはアトウッド自身の留学時期と重なっている。

こうした歴史的コンテキストに位置付けて「ダンシング・ガールズ」を読むと、アンの専攻が都市デザインというのは重要である。二度の「スカリー・スクエア」への言及も見逃せない点である。そこは「売春婦がうろついている場所」「跡をつけられるかもしれないし、ひょっとするともっと悪いことが起こるかもしれない所」(200)といういかかわしい場所の象徴として言及されている。踊り子たちを「スカリー・スクエアの売春婦かもしれない」と考えたのは、オールド・ハーワードのストリップ・ショーとの連想からであろう。一時的居住者であるアンは、あるいはアンが一時的滞在者でありスカリー・スクエアの歴史を知らないからこそ、そこを不道德な場所だと認識したのである。そしてさらに重要なことは、彼女が人生の敗残者をためらいもなくスカリー・スクエアの表象と結びつけている点である。

作品中アンは、理想的な都市デザインとして、緑の広がる土地に川が流れ、自然風庭園を思わせるような空間を想像していた。しかし彼女が描く理想郷は、成功する可能性のある人間だけの排他的空間であり、高い鉄柵に囲まれていた。

... there was now a high wire fence. Inside were trees, flowers and grass, outside the dirty snow, the endless rain, the grunting cars and the half-frozen mud of Mrs. Nolan's drab backyard. That was what *exclusive* meant, it meant that some people were excluded. Her parents stood in the rain outside the fence, watching with dreary pride while she strolled about in the eternal sunlight. (221)

アンの排他性は、アラブ人学生を下宿から追い出したノーラン夫人のそれと重なる。友人たちと踊り子三人を自室に呼んでパーティを開いた彼は、騒音に激怒したノーラン夫人によって下宿から追い出された。よそ者を排除するノーラン夫人をアンは批判する。しかし、アン自身もまたノーラン夫人と同類だったのである。

このように「ダンシング・ガールズ」のスカリー・スクエアは、人生に成功した人々の空間から除外された場所として表象され、売春や暴力のような「道徳的腐敗と社会的逸脱」と結びつけられている。アンが考える都市像とは、敗残者たちを一掃した清潔な空間であり、まさに1950年から60年代にかけてのボストン再開発機構が意図していたものと重なる。アトウッドはアンの理想的

都市像を通して再開発機構が行なった排除精神を批判したかったのかもしれない。「ダンシング・ガールズ」の結末では、アンの都市像から鉄柵が取り除かれ、緑地で踊り子が踊っている姿が想像されている。しかしその踊り子はノーラン夫人や友人らの混合体であり、結局アンには踊り子の姿や実態を理解することはできないのである。踊り子をイメージできないということは、スカリー・スクエアの実態も分からないということである。たとえアトウッドがボストンの都市再開発に批判的であったとしても、スカリー・スクエアを改善すべき場所だとするレトリックを使用せざるを得なかった。ディヴィッド・クルーが語るように、スカリー・スクエアは「ボストンの活気づいた歴史の実例としてではなく、消えつつある旧市街地のシンボルとして使われている」のである (Kruh 148)。

注

1. ジョン・コットンのアメリカ移住までの経歴や事情については、小倉いずみ『ジョン・コットンとピューリタニズム』を参照した。
2. 当時の三つの山については、Walter Muir Whitehill, *Boston: A Topographical History* (5-8)を参照のこと。
3. ウィリアム・スカリーの姉は、愛国主義者でボストン茶会事件に関与したトマス・メルヴィル (Thomas Melville, 1751-1832) と結婚した。この夫婦の孫が『白鯨』 (*Moby Dick*) の作者であるハーマン・メルヴィルである。
4. 1838年の2月には一時期 Pemberton Square と名称された。その後ペンバートン・スクエアはスカリー・スクエアのすぐ南の開発地 (旧名 Philip Square) の名称となった。
5. スカリー・スクエアの当時の状況については Kruh1-11 を参考にした
6. Cornhill は街路の名。1807年から1828年までは Market Street と呼ばれていたが、1829年より Cornhill と呼ばれた。現在はシティ・ホール・プラザ (City Hall Plaza) がある。都市再開発前から存在した書店 Brattle Book Shop は現在、ボストン・コモンズの近くのウェスト・ストリート (West Street) で営業している。



7. 反奴隷制度協会の創設者の一人であるウィリアム・ロイド・ギャリソンが創刊した新聞。

8. Underground Railroad

9. Kruh 34-36.

10. Adventism. ウィリアム・ミラー (William Miller, 1782-1849) が主導する宗派で、1844年10月に世界の終末が来るという説。

11. 当時のボストンの都市開発については O'Connor, *Building a New Boston* を参照。

12. Boston Housing Authority. 1935年に設立。公的援助を必要とする家族のために住宅を供給する公社。当初は荒廃した地域の都市開発も業務だったが、それは1957年よりボストン再開発機構 (Boston Redevelopment Authority) に移管した。

13. サウス・エンドも再開発対象地域だったが、13エーカーに858世帯という小規模地域のために問題は少なかった (O'Connor 126)。

14. ウェスト・エンド再開発は、元の住宅地が治安や衛生面で標準以下であり、住宅地撤去についても長い時間をかけた議論の結果だと肯定的な意見がある一方、住民の大部分が教育を受けていない未組織の移民で英語も理解できなかったため、たやすく開発の被害者になった、という否定的な意見もある。

O'Connor, 130-31.

15. *Business Week*, Dec.19, 1959. Kruh 129.

16. *U.S. News and World Report*, Sept 21, 1964. Kruh 129.

17. Ilaqua 4.

18. Joe and Nemo. Kruh 105-112 参照。

19. ガイドブックとして A・C・リヨン (A. C. Lyon, 1947)、ジョージ・ウェストン (George Weston) の『ボストンの道』 (*Boston Ways*, 1957)、パール・シフ (Pearl Schiff) の小説『スカリー・スクエア』 (*Scollay Square*, 1952) を分析している (Gilbert, 125-126)。

20. A. C. Lyon, *Invitation to Boston* (1947).

リヨンは引用に続けて、スカリー・スクエアの地下道入口近くに、1684年に最初の無料手習い学校が出来たこと、コート・ストリートがかつてプリズン・レーンと呼ばれていて、その監獄について、ホーソーンが『スカーレット・レター』で描写していると言っている (“Near the Scollay Square subway entrance the first free writing school stood in 1684. From this site you can look across to Court Street which once was called Prison Lane, because the colonial jail was there. That is the jail Hawthorne describes in *The Scarlet Letter* and the one where victims of the witchcraft madness languished until they were tried and hanged in Salem. 120)

21. 「ダンシング・ガールズ」における「ジョンソン大統領」(205)への言及は、「ダンシング・ガールズ」の背景が1963年以降であることを物語っている。しかしその一方で、「Buckminster Fullerの講義」(207)は1961年~62年であるため、この作品の年代確定はかなり困難である。

22. Charles Eliot Norton(1827-1908). ハーヴァード大学出身の教育者、編集者。彼の教え子であるC・チョーンシー・スティルマン(C. Chauncey Stillman)が博学な師の功績にちなんで、1925年、ハーヴァード大学に詩学講座を開設。幅広い学問分野から選ばれたチャールズ・エリオット・ノートン詩学教授(Charles Eliot Norton Professor of Poetry)は、1年間の在任中に6回の講義をすることになっている。T・S・エリオット、イーゴリ・ストラヴィンスキー、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、レナード・バーンスタインもこの講座の教授に任命された。

使用文献

- Atwood, Margaret. *Dancing Girls and Other Stories*. London: Vintage, 1996.
- Gilbert, Daniel A. “Why Dwell on a Lurid Memory?”: Deviance and Redevelopment in Boston’s Scollay Square.” *Massachusetts Historical Society*. Vol. 9(2007): 103-33. <http://www.jstor.org/stable/25081214> 05/09/2013.
- Ilaqua, Joan. “Recovering a Sordid Past: Public Memory of Scollay Square.” Graduate History Conference. 9. March, 2013. U. of Massachusetts, Boston. <http://scholarworks.umb.edu/ghc/2013/panel4/2/>. 05/09/2013.
- Kruh, David. *Always Something Doing: A History of Boston’s Infamous Scollay Square*. Boston and London: Faber, 1990.
- Lyon, A. C. Lyon, *Invitation to Boston 1947* . http://archive.org/stream/invitationtobost000431mbp/invitationtobost000431mbp_djvu.txt *Internet Archive*. 28/10/2013.
- O’Connor, Thomas H. *Building a New Boston: Politics and Urban Renewal 1950-1970*. Boston: Northeastern UP, 1993.
- Whitehill, Walter Muir. *Boston: A Topographical History*. 2nd edition. Cambridge, Massachusetts: Belknap P, 1975.
- 小倉いずみ 『ジョン・コットンとピューリタニズム』 彩流社、2004.
<http://www.bambinomusical.com/Scollay/index.html> 05/10/2013.
- “Norman B. Leventhal Map Center”
<http://www.walktothesea.com/index.html> 18/10/2013
- “And This Is Good Old Boston.” <http://goodoldboston.blogspot.jp/> 18/10/2013.